

〈新刊紹介〉

時枝誠記博士著

「文章研究序説」

時枝誠記博士は、昭和二十三年のころ、

東京大学の講義において、はじめて文章の問題を講じられ、その一部を、昭和二十五年九月刊の岩波全書「日本文法口語篇」の第四章におさめられた。従来の語論、文論とは別に、新しく文章論を設定することは、「言語研究における対象規定に対する考へ方の、根本的な変革によるのみ可能」(13ページ)だとされる時枝博士は、言語研究における質的單位観——質的統一体としての一全体が、分析の究極においてではなく、研究の出発点においてすでに与えられているとする單位観——にもとづいて、文章研究という部門を設定されたのである。それは、時枝博士の言語観、言語研究観の当然の帰結でもあった。しかし、文章研究を文法学・国語学の正面の問題にすえることは、それまでほとんど試みられていかなかったことであつたから、当時においては、問題の提案と示唆にとどまらざるをえなかつた。その後、時枝博士は、この問題の基礎理論の確立と、課題の探究とに、全力をかたむけてこられ、その成果を、「国語学」「国語と国文学」「文学・語学」「国語研究」などの諸雑誌に、次々と発表された。

「文章研究序説」は、これらの論文を整理補筆して、体系化されたもので、いわば、約十年にわたる思索と探究の集大成である。「言語研究における対象規定に対する考へ方の、根本的な変革」によって可能になった、文章研究という新分野の開拓における、最初の体系的な成果である。

本書は二編からなり、第一編「総論」では、一 言語研究の一部門としての文章研究、二 文章の定義、三 文章研究の要諦、四 文体論と文章研究、五 文章研究における課題とその課題設定の方法の五項目に分けて、理論的に述べられている。第二編は「各論」で、第一章文章表現の機構、第二章文章史記述の構想の二章から成り、おのおのさらにこまかい項目に分けて述べられている。量的には、「総論」が四七ページ、「各論」の第一章が一八八ページ、第二章が一〇ページで、「各論」の第一章が全体の四分の三以上をしめている。

本書の内容は、上の構成によつてもある程度察することができるが、「序」に書かれてある、なにゆゑ本書を「序説」とよぶかの説明によつて、いさうよく知ることができよう。本書は、二つの理由で「序説」とよばれる。一つは、本書が、「文章に関する最も根本的な問題が何であるか、そして、それはどのやうに展開されるか、文章研究には、どの

やうな研究課題があるか、そのやうな研究課題は、どのやうにして設定されるかといふやうなことを、文章の根本的性格から引出さうと試みた。或はそのやうな問題を引出す根拠を思索しようとした」ものであるからであり、もう一つは、「文章研究の結論的な成果の報告といふよりも、文章研究の旅に発足するに際して、予め取り揃へて置かねばならぬと思はれる旅行用品と旅行日程とを書き出して見たやうなもの」であり、「文章研究に関する、考へ及ぶかぎりの問題を引き出すこと」に努力がはらわれた書物であるからである。

では、どのようなことが、文章研究においては問題となるのか。時枝博士は、「言語は、人間の表現・理解の行為である」とする言語過程説の仮説的な理論にもとづいて、言語研究の課題を設定されたのであるが、「国語学原論」「同統篇」、それは、1 言語の表現形式の特異性、2 言語の成立条件(イ 主体、ロ 場面、ハ 素材) 3 表現性から見た問題設定であつた。文章研究においても、これと同じ方法で課題が設定されている。第二編の「各論」は、この課題に就いて展開されているのである。「文章の表現形式の特異性」では、「文章の表現形式の特異性は、言語表現が、根本的に、時間的・継時的・線形的性格を持つてゐることに規定され

たもので、これは、語・文・文章に通ずる根本的性格である」(49ページ)とされ、この立場から文学における「冒頭」の題がとりあげられている。また、文章の「言語」とちがって空間性(図式的性格)をもつことも問題にとりあげられている。主体の立場からは、「伝言」「合作」「編纂」「推敲・改稿・別稿」の問題が、祝詞・宣命・宣旨、平家物語、源氏物語などを例として述べられている。これらの例は、単なる例というよりは、文章研究の具体的な「成果」ともいえるべきであろう。これらの古典の、きわめて独創的な研究成果である。場面の立場からは、「国語学原論」で展開された理論が、文章研究に適用されている。素材の立場からは、作文教育の基礎理論としても興味ある問題が提示されている。「言語の素材と文章」は、もと「教育科学国語教育」に発表されたもので、作文教育の基礎的な問題を示唆する意図をもって書かれたものである。表現性の立場からは、詩歌を例として、文章にも「詞」的なものと「辞」的なものがあり、「詞」的なものは絵画的で、「辞」的なものは音楽的であるという、独特の論が展開されている。方丈記と平家物語のおのおの冒頭を比較して、両者いずれも無常を述べたものであるが、文章の線条的性格から考えると、前者は無常の世に処する作者の生活態度の表

向であつて「詞」的であり、後者は平家の興亡に対する作者の詠嘆の表現であつて「辞」的であるとすると、詞と辞の相対性の問題をとりあげて、興味のある見方を示されている。第二章は、量的には、第一章にくらべてきわめて少ないが、問題の重要さは、第一章にならぶものと考えられているようである。

「文章研究序説」にあつたかわれた問題は、おおよそ右のようであるが、時枝博士の構想としては、「文章研究」と国語の实践、国語教育との交渉の問題や、文章研究史の記述などが考えられている。これらの、残された問題をあわせ考えると、時枝博士の構想された文章研究の全貌をうかがうことができるわけである。未開拓な領域にくわを入れるにあつて、全体の見通しとその要所をしっかりとっておさえいかれる時枝博士の、いわば開拓者の姿を、本書に見出すことができる。

本書から学ぶべき点はきわめて多い。文章研究はもとよりであるが、国文学の方法論としても、また、国語教育の問題としてもうけとることができる。しかし、何よりもまず、未開拓な分野にわけ入っていくときの態度、方法をこそ学ぶべきだとも考えられる。「言語過程説」という仮説に立つて、そこから可能なかぎりの問題をはりおこし、一途にそれを追求していく強じんな、また必死な学問の態度・方法は、国語教育学を追求していくと

するものにとつても、深い示唆と感銘を与えずにはおかない。

なお、時枝博士は、昭和三十五年九月二十二日、東京学芸大学世田谷分校で開かれた全国大学国語教育学会の席上、「文章研究序説」について、大要次のようなことを話された。

「研究にあたっては、問題をどう設定するか、どういう生系をたてるかが重要な問題になってくる。問題の設定は、インスピレーションでひらめいてくるものではない。理論が必要なのである。自分は『言語過程説』という仮説をたてて、それをポイントにして問題を設定した。学問は、対象そのものから出てくるのではなくて、仮説から出てくる。『文章研究序説』も、そういう角度から読んでほしい。」

時枝博士の学問の性格と方法を示すものとして注目される。

(昭和35・9・1・山田書院刊、A5判、二五六ページ、三六〇頁)

(大槻)